

「まち学習」からはじまる「まち育て」 —子どもがつぶやく私の「場所」—

弘前大学大学院地域社会研究科 教授 北原 啓司

「まち学習」における「発見的方法」の必要性を感じながら、学校教育における「教育」ではなく「学習」であるとする英国の住環境学習を目標として、我が国で進められてきた「総合的な学習の時間」の意義を評価したい。そしてそれが、高等教育における「総合的な探求の時間」の新たな登場、そして「地理総合」という新教科の登場と、追い風になっている状況において、まちの「学習」からシビック・プライドの形成につながって行くものとして、「場所」に自らの想いを込め、生き活きとしたアクティビティを生起させることが「まち育て」につながっていく可能性と必要性を、いくつかの事例の紹介をもとに論じている。

1 「まち学習」と「まちづくり学習」

一般に知られている「まち」の学習の多くは、社会科の延長として展開されることが多く、それは地理学の領域に位置づけられることとなる。寺本潔氏（当時、愛知教育大学）との協働で有名な愛知県の西尾市立西尾小学校の取組みは、まさに地理学の視点から、地域を調べ、そしてそこに住んでいる人々を訪ね、学習していく。「まちの先生」と呼ばれる地域住民が、そこでは大きな役割を果たすことになる（西尾小学校ではこれを PTCA と表現していた）。

このような「まち」の学習では、教える側（教師）があらかじめ地域資源を調べ上げておき、それを引率して児童に見せる授業が展開されていくこととなる。いわゆる社会科見学の時間が「まち」の学習のベースに位置づけられてきている。見学の中から習得してきたものを、作文や絵、あるいは理解度によって評価していくという小学校学習である。

学校教育の場面では、この方法は極めて当たり前の方法である。授業の中で何を気づかせ、どんな方向に思考を発展させていくかを、教師は綿密に計画し、それを実行していく。「何を見つけてくるか」ではなく、「〇〇をどんなふうに見てきたか」が、学習評価の中心テーマとなる。

しかし一方で、ある定められた範囲を児童たちに自由に歩いてもらい、真っ白なキャンバスに絵を描くが如くに、そこで生まれる発見そのものに重きをおき、それを教師と児童が共に受け止めた上で、その後の教室の学習の中で、様々な資料を用いて調べていくという学習方法もある。

建築学の世界では、早稲田大学の吉阪隆正研究室で展開された「発見的方法」がそのような特性を持っている。そのルーツが、考現学の生みの親である今和次郎氏の手法であることは言うまでもないが、80年代に我が国で生まれた路上観察学会やタウンウォッチングは、まさにここから生まれていったものであった。

この「発見的方法」は、そもそも、集落調査研究において1960年代後半から一つのブームを形成した「デザイン・サーヴェイ」の登場につながっている。全国の建築系あるいは芸術系の研究者や学生たちが、地域に赴き、そこに寝泊まりしながら空間を詳細に記録し、またそこで発生している住民の生き生きとしたアクティビティを明らかにする方法は、地域資源を活かす観点からの計画論につなげていくという大義名分を持ちながら、デザイン・ボキャブラリーの発見を主に多様に進められていったの

だった。

地理学的な学習と、ここで提示した発見的な学習手法は、方法論としては異なるものの、ある意味で、その狙いは同じ延長線上にある。地域の文脈（コンテキスト）を丁寧に分析していくというスタンスである。前者は、地域特性が共通認識として既に存在しているところからスタートしていく方法であり、それを深く調べ上げていくところに学習の目標が設定される。一方、後者は、何が出てくるかわからないという一種の不安感を伴うものの、発見の喜びや意外性といった、他の学習では得られないような経験をする可能性がある。

私が東北大学工学部建築学科から弘前大学教育学部に移ったとき、私自身の頭の中では、「まち学習」ではなく「まちづくり」学習という感覚が支配していたように思う。それは上述のデザイン・サーヴェイに夢中だった建築学生のノリと同様に、まちづくりという現場に活かせる学習でなければならないという動機に溢れていたのだった。

そんな前のめりの頃、私同様に建築から教育に転出した大先輩である小澤紀美子先生（東京学芸大学名誉教授）が私を新たな世界に誘っていただいた。

2 英国の住環境学習

それは、1996年に参加した「英国の住環境教育に関する視察ツアー」であった。小澤教授を団長に十数名で10日程度、ロンドン、グラスゴー、ニューカッスル等を視察した経験は、その後の自分自身の仕事にも大きな影響を及ぼすこととなった。

住環境教育の進め方に大きな特徴のある英国は、その背景に教育と都市計画に関する次のような考え方が存在していた。

1967年に出された初等教育に関する教育審議会答申“Children and their Primary Schools”で用いられた「環境の活用」(use of environment)という言葉が、その端的な表れである。日本よりも先に都市化の拡大により田園部の豊かな自然環境が破壊されていく状況にあって、環境を重視する学習を始めていることは当然のことであるが、そこに「活用」という概念を持ち込んでいることこそ、英国の住環境教育の特色であろう。環境を「まもる」という考え方がその中心にある我が国の環境教育において、

環境を「活用」とするという表現はそれほど前面に来るものではない。しかし、英国の教育には自然環境、歴史的環境に限らず、この考え方が基本にある。

一方で、1969年に環境計画の決定過程における住民参加の仕組みを提起した“People and Planning”には、子どもたちが将来、環境計画に関わる場面に遭遇することを想定して、義務教育の中でそのための資質を養成すべきとの考えが盛られている。

単に環境の重要性を説くことが中心となっている日本の義務教育における環境学習と比べて、英国の場合は、環境に主体的に関わることのできる人間を育てるためのプログラムとして住環境学習（まち学習）は進められているのである。

環境にポジティブに環境に関わることのできる子どもたちの能力の豊かな可能性を示唆するとともに、一方でその責任の大きさを自覚させる。

1970年代に英国で花開いた「まち学習」の実践は、「まちに出かける」ことを基本とした学習プログラムであった。1973年にCollin Wardらにより発行された「STREET WORK」は、英国における「まち学習」の基礎を形づくるものとして高く評価された。

タウン・トレイルという授業方法では、子どもたちがまちを歩き回るルートそのものが、教材となった。理科教育で体得する「観察する眼」をまちで養う。美術教育で養成する表現力を、集合住宅の窓のスケッチを数枚描く中で身につけていく。授業が始まると同時に、児童たちは学校周り、そして周辺の街区を歩きながら、様々なモノやコトを見つけてくる。そこから授業は進んでいくことになる。見つける→調べる→考える→創造する。これこそが、英国の「まち」学習の基本であり、まさにそれは発見的方法と呼ばれたスタイルそのものであった。

英国の都市&田園計画協会（TCPA）は、「まち学習」のための専門部会を設置し、都市計画の側から地域の学校と協力して実験的なプログラムを開発するような動きも生まれている。そこでは、美術教育の専門家とのコラボレーションとしての取り組みがスタートし、子どもたちの発達段階に応じて「まちや建物に関心持つこと」、「批判能力と他の人の意見を理解する能力を併せ持つこと」、「自分でデザインする能力、表現する技術を育てること」を目標とし

て魅力的なプログラムが展開された。

そこで登場したのが、中学教師出身である Eileen Adams らによる「Front Door Project」であった。とはいえ、実際にはその学習成果が生かされる局面は極めて限定的である。児童生徒にまちに対する関心を持たせることには成功したとしても、授業の中で発表するだけでは、教える側にも学ぶ側にも一種のフラストレーションを感じさせるだけである。

しかし英国の「まち学習」の基本的なスタンスは、ボクシングのボディ・ブローのように、今すぐには効果が見られなくても後にじわじわと効いてくるというものであると言ってよい。息の長いスパンで捉えていくことができれば、仮に現実の住環境改善に結びつかないとしても、「環境と向き合う能力」を身につけさせることは可能なはずである。

しかし、学んだことを活かすという達成感の充実という観点から言えば、やはり、現実的に学習成果を環境整備に結びつけることのできる対象が必要となってくる。そこで、浮かび上がってきた格好の題材が学校の校庭改善プログラムであった。

日頃関わりを強く持っている学校の環境改善に対する意見を持ち、行動に移すことのできる子どもでなければ、自らが居住するまちの住環境と主体的に向き合う能力などを持ち得るはずもない。

1990年に英国の教育科学技術省から発行された学校向けのガイドブック「Outdoor Classroom」は、まち学習の視点を校庭改善に向けさせることに寄与しており、またハンプシャー州の公益団体である、Leaning Through Landscapes Trust のように、校庭改善を行う活動を支援する活動組織が各地で生まれ、全国的な活動に広がっていった。

ここでは、筆者が1996年に現地で話を聞くことのできた英国中部のニューキャッスル市に存在する Cragside Primary School における校庭改善のプログラムから注目すべき教育手法を紹介したい。

4～5年生を巻き込んで一学期全体を使うカリキュラムとして実施されたこのプロジェクトは、まず最初に、学校敷地内に埋め込まれた石やマンホールの表面あるいはレンガの壁や窓など、ありとあらゆる「かたち」を写し取ってくる。次に、校庭の使われ方を実際に観察し、各施設の利用人数を正確に調べて図に表す。そして、そこで自分たちが撮影し

写真1 the good, the bad, the ugly

Name	the good	the bad	the ugly
I want to keep....	TREES PLANTS RAMP WALLS NETBALL PITCH BASKET BALL NETS GATES SNAKE STEPS ALLEY BINS BRICKS	I want to get rid of.... FLOOR OLD DOORS STONE NEXT TO FLOOR THE ISLAND THE MAP WINDOWS SNAKE STEPS SINK TREE BEHIND RAMP STONES ON SURFACE	I want to improve.... DRAINS SURFACE DRAWINGS ON GROUND MORE BINS NATURE DOORS COLOURS NET BALL PITCH SCHOOL GATES GARDEN BIKE RACK BASKET BALL HOOPS

出典：授業資料より

てきた様々な場所を、Good（このまま残しておきたいもの）・Bad（できれば除外したいもの）・Ugly（改善したいもの）という三段階に評価して、図表に記入する（写真1）。

しかし、「まち」に関わる学習の取組みを教育の現場が手がけようとする、往々にして、発見的方法とは異なる手法に陥ることが多い。どうしても、まちや環境に関する知識を教えるための学校教育になってしまうのである。

英国は異なる。発見を通して、児童に次のような考えを持つことを促す学習である。それは見つけた課題を自分たちは解決できる、それを解決するのが学習のゴールであるという考え方を、それぞれのレベルで児童たちが抱くということに尽きる。

環境教育というのは、理念や知識を詰め込ませることではないはずである。敢えて言い換えるなら、環境との関わり方を児童なりに考えさせることではないのか。そういう意味では、環境教育、住環境教育、住教育といった表現に、私はやや、違和感を感じざるを得ない。正確に言う表現するなら、環境学習、住環境学習、住学習ではないのか。

そんなことを考えていた時、文部科学省から新たな教育の指針が出されたのであった。

3 総合的な学習の時間が目指したもの

それは2002年から我が国の学校教育に導入された総合的な学習の時間であった。以下は、1998年に文部科学省教育課程審議会がまとめた総合的な学習に関する答申の文章である。

- ①各学校の創意工夫を活かした横断的・総合的な学習や児童生徒の興味・関心等に基づく学習などを通じて、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てる
- ②情報の集め方、調べ方、まとめ方、報告や発表・討論の仕方等の学び方やものの考え方を身につける
- ③問題の解決や探求活動に主体的、創造的に取り組む態度を育成する
- ④自己の生き方についての自覚を深める

ここに提示されているように、学校教育で求められていることは、知識や教養を身につけるのではなく、自ら学ぶ力を育てていくものであり、それは「生きる力」形成につながるものであるとされていた。

しかし、学力低下を総合的な学習の時間の存在に結びつけようとするマスコミや教育関係者、PTAにより、結果的に学習時間数が減らされていくこととなる。特に、「総合的な学習の時間＝ゆとり教育」という思い違いが、せっかくの重要な学習の進展を止める形となっている。

20年ほど前に、私自身が経験した総合的な学習の時間に実施した八戸市の小学校5年生に対する「まち学習」について触れてみたい。ニュータウンに新設された小学校で実施したまち歩きの学習で、最も象徴的であったのは、最終発表会の直前に見た光景だった。

子どもたちは、グループで10年後のニュータウンという紙芝居をつくり、それを発表する練習をしていた。そこで、あるグループの男の子が先生に怒られていた。彼らの紙芝居の絵には、お墓と幽霊とそれを怖がる子どもたちが描かれていた。授業参観日を兼ねた発表会に、しかもテレビの取材が入っている時に、そんな「ふざけた」絵を描くべきではないというのが、その場での教師の指導であった。

肩を落とした男の子に聞いてみた。「この絵は、なにを描きたかったの?」。「うちのおじいちゃんはいま75歳だから、たぶん10年後は亡くなっていると思うけれど、この団地にはお墓が無いの…」

彼はふざけているのではなく、いたって真剣だった。何とか団地の中につくった墓に祖父が眠っているという未来の姿を子どもたちは描いていた。

2時間近くをかけて街を歩いて気づいた墓地がないという事実は、ニュータウンに固有の大きな課題だった。だから10年後には、なんとか墓地がなければならないという切実な気持ちが反映された「ふざけた」紙芝居であった。よく見ると、幽霊（その子のおじいちゃん）は微笑んでいた。

教えなければならないことを授業で扱おうと思うと、子どもたちの純粋な気づきや発見を時間中に取り上げることが難しくなってしまう。学校教師が授業の前に必ず設定する「本時の目当て」というものがある。その目的から逸脱する「発見」は想定外であった。

しかし、この違和感を克服していかなければ、「まち」学習は「総合的な学習の時間」と同様に、効果を発揮する場面を失ってしまうのである。

4 発見から探求へ

総合的な学習の進め方に大きくメスを入れる形で、文部科学省は学校現場に新しい考え方を示した。

学習指導要領の改訂により、高等学校の「総合的な学習の時間」は、来年度から「総合的な探究の時間」に変更される。「総合的な探究の時間」では、生徒が主体的に課題を設定し、情報の収集や整理・分析をしてまとめるといった能力の育成を目的としている。

そこでは教科や科目等の枠を超えた課題に取り組むことが、これまでの総合的な学習の時間と同様に謳われており、学習対象や学習領域が特定の教科や科目等にとどまらずに、横断的、かつ総合的でなければならない。これは、教科や科目等の枠を超えて探究する価値のある課題に取り組んでいくということであり、「まち学習」はまさにそれに恰好のテーマであると言える。

文部科学省は、これまでの「総合的な学習の時間」の実施にあたって、大きな成果を上げている学校がある一方、趣旨・理念が必ずしも十分に達成されていない状況があったことを認識している。小学校と中学校とで同様の学習活動を行われ、系統的な学習が進んでいないことも指摘されている。また、総合的な学習の時間が、教科の補充・発展学習や学校行事などと混同された実践が行われている例も見られる。[参照：総合的な学習の時間の現状と課題、改

善の方向性（文部科学省）]

全国の高等学校では、2020年の学習指導要領改訂を先取りする形で、2019年度入学の高校1年生から「探究」という名の科目に取り組む高校が登場してきている。特に地域の課題解決型学習(PBL)は、地方創生ブームを追い風にして、多くの高校ですすで取り組まれてきている。

しかしここに来て、単なる「学習」が「探究」に置き換わることではないということが、次第に教師たちの頭を悩ませている現実がある。

このような中で、全国の高校から注目を集めている「総合的な探求の時間」の先進的な事例として、岩手県立大船渡高校の実践「大船渡学」を紹介することとする。

この取組みは、梨子田喬教諭（現在は盛岡第一高校）と菊池広人氏（いわてNPO ネットサポート事務局長、弘前大学大学院地域社会研究科博士課程在学中）との協働により進められてきたものである。

大船渡学は3年間を通して進められるプロジェクト学習である。1学年は、探究活動への理解、自らの興味関心ある分野でのテーマ設定、「私の探究活動」という発表を行う。続いて2学年では、新たな課題を整理し、1年次よりさらに学問的に発展させた探求を進め、「私の探究活動」という発表を行う。そして最後に3学年では、振り返り学習を行い、論文の作成を行うというものである。

地域を学ばせたいという気持ちから、5年前にスタートし、翌年には「大船渡を学ばない大船渡学」をキーコンセプトに、自分軸で学びたいことを深める時間を目指すこととなった。

大船渡高校では、新学習指導要領における総合的な探求の時間を、探究が高度化し自律的に行われるものであると見なし、他教科や科目による探究との差別化が必要であると考え、生徒は、「自分らしく深く学ぶ」を目標に、教員は「教える」から「伴走」へ目標を変えていく。

1年生は地域で原体験を積み、学ぶ意味を深めていくことが中心となり、2年生は「研究」という視点で、より専門的でマニアックな領域に突入していくことになる。そして夏休みと冬休みを、それぞれ「夏の陣」、「冬の陣」と命名して、課外（各5日間）を全て探究の時間に充てており、そこでの狙いは、

以下の通りである。

○ひとりひとりの「自走力」を高める。

○深く学ぶたのしさを実感する

○多様な視点共有の価値を実感する

英国の住環境学習につながるものを私は感じずにはいられない。教育ではなく学習であるという英国の考え方は、「教える」から「伴走」へ目標を変えた大船渡学に通じる。また、環境に主体的に関わることのできる人間を育てるためのプログラムである英国の住環境学習が、「大船渡を学ばない大船渡学」というコンセプトにつながっている。単純な地域学習に偏りがちな教育現場の考え方を、「自ら学び、自ら考え、主体的に判断するという当初の総合的な学習の時間の狙いが、深化しているのである。

シビック・プライドを育てる機会が、我が国の教育現場で確実に増えてきている気がする。

5 地理総合という教科の魅力

そのような流れに拍車をかけるように、異なる改革も進んでいる。「総合的な探求の時間」と同様に2022年度から新学習指導要領により、高校で「地理総合」が必修となる。その教育内容として、「持続可能な地域づくりと私たち（自然環境と防災、生活圏の調査と地域の展望）」が取り上げられている。

2019年度日本都市計画学会（2019年11月10日、横浜市開港記念館）において実施されたワークショップ「持続可能な地域づくりの学習をどう支援するかー高校での地理総合の必修化と都市計画専門家の役割ー」に、私も講演およびパネリストとして参加させていただいた。

ここでは、地理総合のねらいと内容、都市計画に与える影響、高校における実践状況、大学における協力の可能性を議論し、専門家による高校における「持続可能な地域づくり」の学習への支援のあり方、その果たす役割について意見交換が行われ。

最初に解説をされた当時の文部科学省初等中等教育局視学官の濱野清は以下のような点を指摘している（箇条書きで整理する）。

○社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む「社会に開かれた教育課程」の実現が必要となる。

○生きて働く知識・技能の習得など、新しい時代に

求められる資質・能力を育成するためには、知識の量を削減せず、質の高い理解を図るための学習過程の質的改善が必要になる。

○教育方法に関するこれまでの議論においても、子供たちが主体的に学ぶことや、学級で協働的に学ぶことの重要性は指摘されてきており、アクティブ・ラーニングを重視する流れは、こうした優れた実践を踏まえた成果である。

○高等学校において、義務教育までの成果を確実につなぎ、一人一人に育まれた力を更に発展・向上させることが求められる。

○アクティブ・ラーニングの視点については、深まりを欠くと表面的な活動に陥ってしまう失敗事例もあり、「深い学び」の視点は極めて重要である。学びの「深まり」の鍵となるものとして、「見方・考え方」が重要になってくる。

○今回の改訂が目指すのは、学習の内容と方法の両方を重視し、子供の学びの過程を質的に高めていくことである。「見方・考え方」を軸としながら、幅広い授業改善の工夫が展開されていくことを期待するものである。

前節で取り上げた総合的な探求の時間につながるものとして、そして「まち学習」が高校生の学習、そして「まちづくり」につながっていくものとして、地理総合は大いに期待される。

とは言え、我々のような工学系の都市計画研究者が気をつけなければならないことを逆に感じるようになった議論であった。

高校の地理総合につながる基礎的な学問である地理学の知見は、生活圏の課題の宝庫とも言えるべきものであり、都市計画学は、地理学から生活圏の課題を「仕入れる」ことができると地理学者は指摘する。一方で、都市計画学も自前で生活圏の課題を発見していて、最初に述べたように、それを「発見的方法」として位置づけてきた。しかし、地理学にしる都市計画にしる、研究者や専門家は勘違いしてはいけないのではないか。「この内容であれば、我々は貢献しなければならない」という思い込みが、高校教育が考える地理総合の狙いを崩してしまう恐れがある。

高校生を教えるのは我々の仕事ではない。我々は教育の専門家ではない。都市計画の専門家で高校生

の学習のあくまで伴奏者なのである。探求に出かける高校生たちの羅針盤ではなく、不安な前途に明かりを灯す懐中電灯になるべきなのではないか。

「さあ、よく目を見開いて、歩いて行ってごらん。都市は歩いただけ、物語が生まれる。物語が生まれていく都市もあるかもしれない。何故、物語が生まれないんだろう。一緒に考えてみようか。一緒に歩いていいかな」

先生は、教える人ではなく先に生まれた人のはずである。先に学んでいる人は、後に続く人たちに学ぶ姿を見せ続ける必要がある。そんな基本的なスタンスを思い起こさせてくれる機会だった。

6 子どもたちの「場所」から「まち育て」へ

行政が主催するまちづくりのワークショップで、時々次のような発言を聞いてがっかりすることがある。「やっぱり子どもさんに入ってもらうと、場が和らいでいいですね」、「大人だけだと堅くなるけれど、子どもが入ると雰囲気盛り上がるね」。

とんでもない。子どもたちが入ると、ある意味で「マジ」になるはずである。主催者の目論見に対して忖度などしない、それが子どもたちなのである。

一方で、こちらが全く想定しないことを見つけてくるのも、子どもたちのピュアな目である。ここでは、この20年の間に幸運にも遭遇した、恐るべき子どもたちの眼力を二つほど披露してみたい。

弘前市の中心市街地に立地する吉井酒造煉瓦倉庫は、大正時代に建設された、戦後は日本で最初の林檎酒（シードル）を醸造していた場所でもある。弘前市民にとっては、だれもがその存在を知っている場所であり、内部はどんなふうになっているんだろうと、世代にかかわらず、好奇心を持って眺め続けた場所であった。

弘前市は1996年に文化施設としての可能性を検討する中で、私の研究室に委託研究を出し、小学生から高齢者まで参加し弘前としては画期的な市民ワークショップを開催したのだった。

その中心コンセプトは、創造的な空間を、このストックを活かしながら生み出していくというものだった。そのワークショップで小学5年生がつぶやいた感想を、今も思い出す。

「ここはものをつくる場所だ！」

かつてこの倉庫でシードルの開発が行われていたことなど知るよしもない男の子が、休日の午後いっぱい時間を過ごしたそこは、クリエイティブな空間であった。このつぶやきをどのような形で、レンガ倉庫という空間に表現していくのか。

使われない「空間」として存在するだけだったレンガ倉庫を、市民の大切な「場所」であり、何かをつくる「場所」に再生することの意味こそが、古くて新しい街「弘前」の真骨頂であった。

単なる空間が「場所」に変わるとき、その空間が、かつて「場所」であったときに存在していた物語や想いが、自由に新たな形態で甦ることが必要になってくる。

そしてそれを、見事な発想で形に表現してくれた建築家田根剛さんの傑出した力量によって、市民の意識の外になりかけていた「空間」は、創造的な「場所」として甦ったのであった（写真2）。

一方で、写真3をみていただきたい。れんが倉庫のWSから3年後に、東北地方で最大級の市民参

加による公園が青森市に誕生した。つくだウェザーパークと名付けられたこの公園は、隣接する個小学校の児童、PTA、町内会、商店街等のメンバーによるワークショップを15回以上も開催し、私の研究室がファシリテーションを担ったのであった。

写真3は、公園の完成からほぼ2年が経過した夏、仙台から短大生たちに見学を依頼されて連れて行ったときのものである。小学校の敷地が隣とは言え、直接小学校の所有する土地でない以上は、放課後に清掃する義務などないにもかかわらず、児童たちは清掃をしていたのだった。

「どうしてこの公園を掃除しているの?」。おそらく「そういうふうになっているの」とか「先生にそう言われているの」と言った答えが出るものと思っていた。しかし、そこで赤い体育帽をかぶっている女の子が発した言葉は、「だって、ここ、私たちの場所だもん」であった。

「場所」を感じる感性が子どもたちにあることをれんが倉庫のWSで学んだ。そしてここでは、参加型まちづくりの蓄積が、それを直接知らない後輩たちに脈々と引き継がれて、私の「場所」という意識が形成されていることを知った。

最初に述べた「まち学習」のスタンスが、ボディ・ブロー的に時間をかけて「まちづくり」のマインドにつながっていくという英国流の考え方は、非常に重要ではあるが、探求的な主体形成の学びを高等教育で経験しながら、子どもたちが地域の「関係人口」に育っていくためには、関係性を持っていく「場所」の存在が重要である。

サードスペースなどという流行語を用いずとも、人々が想いを込める「場所」が欲しい。そのためには、地域で起きる出来事や課題を自分事として感じ取ることでできる高校の学習が大きな意義を持つことになる。

子どもが私の「場所」と言える気持ちこそ、シビック・プライドを形成するスタートであり、そこに関係することを自分事として考えることから「まち育て」は持続可能なものとなっていくはずである。

関連・引用文献

1. 北原啓司：市民・子ども・専門家の協働が「空間」を「場所」に変える、日本建築学会建築社

写真2 弘前れんが倉庫美術館



写真3 「だって私たちの場所だもん」



会システム委員会資料「みんなでつくる－専門家は、市民・子どもに「建築」をどう伝えるのか－」、2018

2. 北原啓司：「空間」を「場所」に変えるまち育て－まちの創造的編集とは－、萌文社、2018
3. 北原啓司ほか：特集「英国に学ぶ環境学習」、緑の読本シリーズ 42、公害対策技術同友会、1997
4. 小澤紀美子、木下勇、北原啓司ほか：まちワーク－地域と進める「校庭&まちづくり」総合学習－、風土社、2000
5. 北原啓司、浅野聡ほか：日本建築学会 まちづくり教科書 第6巻 まちづくり学習、丸善、2004
6. 北原啓司：れんが倉庫のゲニウスロキが甦った日－奈良美智展弘前から弘前れんが倉庫美術館へ－、津軽学 12、ものの芽舎、2020